

「拒絶から応答へ」

2014年09月09日

マルコによる福音書7章24節～30節。 イエスはそこを立ち去って、ティルスの方に行かれた。ある家に入り、だれにも知られたくないと思っておられたが、人々に気づかれてしまった。汚れた霊に取りつかれた幼い娘を持つ女が、すぐにイエスのことを聞きつけ、来てその足もとにひれ伏した。女はギリシア人でシリア・フェニキアの生まれであったが、娘から悪霊を追い出してくださいと頼んだ。イエスは言われた。「まず、子供たちに十分食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない。」ところが、女は答えて言った。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」そこで、イエスは言われた。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。

主イエスは、ガリラヤ湖の北西50kmほどにある地中海に面した異教のティルスに行かれた。飢え渴いた民衆に求められた多忙を極める宣教活動から休息を取るためであったのか、エルサレム神殿当局から危険人物として追跡されることから逃れるためであったのか。激しい宣教活動から身を休めるために、ティルスに逃れ、身を隠しておられた。

主イエスは、度々山に登り、一人で祈られた。またユダヤ人の追っ手から逃れ、去って行ったことも記している。苦悩する生身の姿が描かれている。

逃れて来た異教のティルスにおいても、主イエスは病気をいやす権能を持っていると伝えられていて、ここに来られたことが知られた。悪霊に取りつかれた娘を持つ母親が主イエスの所へ駆けつけて来た。彼女はシリア・フェニキア生まれの異教人であった。主イエスの足もとにひれ伏し、娘のいやしを懇願した。主イエスは「まず、子供たちに十分食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない」と答えた。子供たちとはイスラエル人、パンとは神の恵みを意味し、小犬とは異教人を指している。当時、軽蔑を込めて、異教人を「犬」と言っていた。主イエスは、神の恵みであるいやしは、まずイスラエル人に対して与えられ、その恵みは小犬である異邦人のあなたには与えられない。ただ、「犬」と言わずに「小犬」と言っているところに、優しさを感じる。しかし、あなたに対するいやしのパンはないと拒絶した訳である。マタイ福音書10章6節で、弟子たちを宣教に遣わす時「むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところに行きなさい」と言っている。主イエスは神の民イスラエルを宣教の対象にしている。

拒絶された彼女は「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます」と言っている。言葉に敏感で理知的な女性であったことを示しているが、それ以上に娘のいやしを求めて、引き下がらなかった。彼女の言葉を聞いた主イエスは「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい」と応答している。

ここで、何が起こったのか。主イエスの回心ではないか。イスラエル人の救いを使命としていたが、彼女の言葉から、神の恵みは異邦人にも及んでいることを知らされた。主イエスは、宣教活動を始めた当初から、完全な人間であったのではない。異邦人、しかも女性の求めから教えられ、ご自分の考えを「拒絶から応答へ」と変えられた。人は出会いによって、学び、変えられていく。主イエスも「途上にある人」であったことを伝えている。